

24. 多 良 岳

地 域 諫早市・大村市・北高来郡・佐賀県
交 通 県営バス 黒木下車または轟の滝下車
地 図 諫早（1/50,000）

多良岳火山は長崎県と佐賀県の県界に位置し、東西約24km、南北約34km、面積約590km²を有し、富士山よりやや大きい死火山である。しかし、多良岳火山は一般に低く、1,075.5mの経ヶ岳が最高峰で他に1,000mを越えるのは五家原岳だけである。

多良岳連峰は大きな噴火口の火口壁が残っているものと考えられていたが、そうではないらしい。郡川上流の萱瀬ダム付近のまわりに鳥甲山・大花山・五家原岳・金泉寺・経ヶ岳・カツカケ山・ササノ岳・遠目山を結ぶ稜線が半円周状に認められるのは、浸食作用の結果である。

多良岳火山の基盤は諫早・大村南部や嬉野付近に分布する古第三紀層と玄武岩類である。これらをおおって、しそ輝石質岩系に属する安山岩類からなる多良岳火山岩類が存在する。これらの関係をまとめて表に示す。

多良岳火山の本体を形作る多良岳火山岩類の噴出時期は高橋清・倉沢一（1960）はⅠ～Ⅳ期に分けたが、松本徂夫（1963）は、北中部九州の火山活動に対比して、第Ⅰ・第Ⅱ期と第Ⅲ期の大部分の噴出物を更新世（洪積世）初期～中期の豊肥火山活動の産物とし、第Ⅲ期の一部と第Ⅳ期の安山岩類を更新世中期～後期の山陰系角せん石安山岩に相当するとした。

豊肥火山活動というのは、その初期に多量の火山^{せつ}碎屑岩類の噴出があり、その下位には凝灰質岩が多く、末期には数枚の輝石安山岩

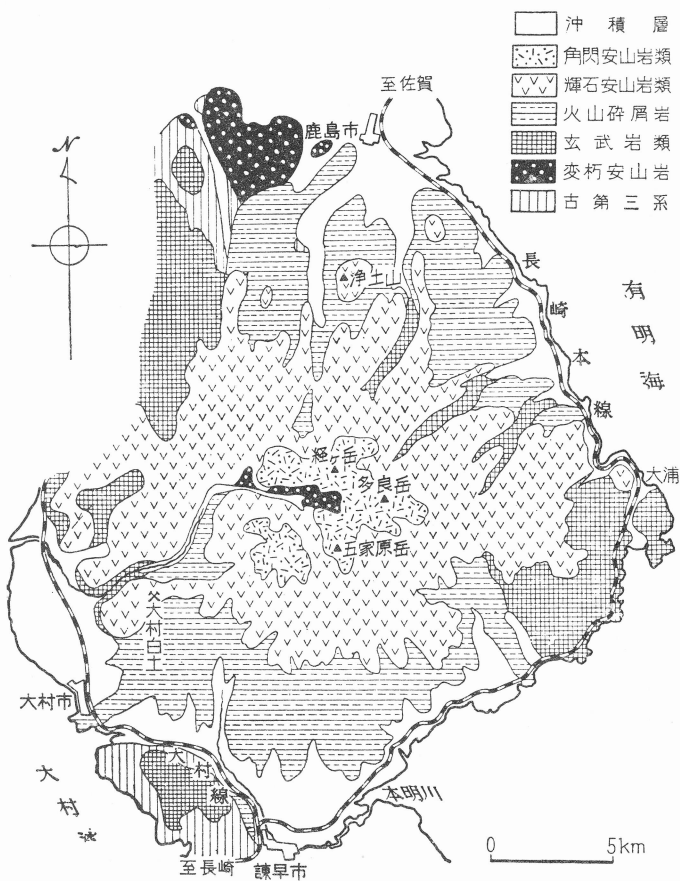
多良岳火山の火山岩類の層序

多良岳火山岩類	III 多良岳溶岩類	<ul style="list-style-type: none"> B 複輝石角せん石安山岩～せん雲安山岩 A せん雲複輝石安山岩 	
	II 筑紫火山岩類	<ul style="list-style-type: none"> B 複輝石安山岩・集塊岩 A 複輝石安山岩質火山砕屑岩（藤津層） 	
基盤玄武岩類	I 玄武岩類	<ul style="list-style-type: none"> C 普通輝石かんらん石玄武岩 （しそ輝石質岩系） B かんらん石粗面玄武岩 （アルカリ質玄武岩類） A 普通輝石・かんらん石玄武岩 （ソレライト質玄武岩類） 	
		第 三 紀 安 山 岩 類	
		古 第 三 系	

の溶岩（いわゆる筑紫溶岩）の流出が認められる火山活動である。長崎市内の長崎火山岩類や口之津層群も豊肥火山活動の噴出物と見られている。山陰系角せん石安山岩類は山陰地方の大山・三瓶山や九州の由布岳・鶴見岳・九重・雲仙などの諸火山をつくるもので、多良岳火山では規模が小さく、多良岳、五家原岳などの山頂部を形成するにすぎない。

多良岳火山の北部と南部の裾野には、複輝石安山岩質火山砕屑岩（藤津層）が標高 350m 付近まで広く分布する。黒木ではさらに高い位置まで分布していて、小学校裏の川近や萱瀬川ぞいに見られる。この火山砕屑岩の一部は熱水変質を受けて黄鉄鉱を含んでいて、従来変朽安山岩とされていた。

複輝石安山岩と集塊岩の互層は火山砕屑岩をおおい、700～800m 付近まで分布しており、経ヶ岳中復ではこの複輝石安山岩の著しい柱状節理がみられる。大村市の山田ノ滝や轟の滝は、この複輝石安山岩溶岩流の末端に懸ったものである。



多良岳地質略図(日本地方地質誌 九州地方より)

多良岳火山の山頂部の角せん石安山岩は多良岳火山の最後の噴出物であり、灰色緻密で、斑晶は一般に小さい。また多良岳頂上付近では板状節理が著しい。
(石川直衛)